

ネットワーク

2017.09
Vol.
140

全国地域包括・在宅介護支援センター協議会会報

NET
WORK

INDEX

特集

いつまでも暮らしやすいまちづくり ～高齢者の買い物支援を考える～

日常生活に欠かせない買い物環境を整えること 2

■ 事例紹介 1 買い物支援から「住民×専門職」の可能性を広げる！
大阪府 泉南市地域包括支援センター六尾の郷 4

■ 事例紹介 2 地域の特性に応じた買い物支援
静岡県 磐田市北部地域包括支援センター 6

■ 事例紹介 3 地域の関係者とともにつくる買い物支援
社会福祉法人 千葉市社会福祉協議会 8

連載

地域で暮らしを支える生活支援サービスのあれこれ 10

第 14 回 走れ！自治会バス「ベレッサ号」
のぞみが丘小学校区 協働のまちづくり協議会
自治会バス部会（福岡県小郡市）

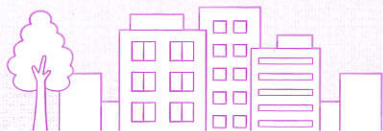
日本縦断 センター職員の汗と涙のエピソード 12

■ 栃木県 宇都宮市よこかわ地域包括支援センター
センター長 主任介護支援専門員 佐藤 亜紀子 氏

■ 岐阜県 岐阜市地域包括支援センター南部
主任介護支援専門員 入学 佳宏 氏

TOPICS 14





事例

1

買い物支援から 「住民×専門職」の 可能性を広げる!

大阪府 泉南市地域包括支援センター六尾の郷

次はちりめんじゃこ持ってきて!

水曜日の午後、ある住宅街の一角にある地域サロンからは、買い物客と店主の賑やかなやり取りが聞こえてきます。「今日もお野菜新鮮やね。毎週楽しみにしてんねん!」「地元で採れたのが多いからね。いつもありがとう」。

大型スーパーの進出によって小さな商店が相次いで閉店し、歩いて行ける範囲に買い物できる場所がなくなりつつあるなか、昭和40年代に開発された坂道の多い新興住宅地で、“地元商店による出張販売”という形で再び「自分で見て買う楽しさ」を取り戻した地域があります。さらに、出張販売がきっかけで閉じこもり気味だった高齢者の外出が増え、「あんた元気にしとったんか?」「久しぶりやね、あんたの顔見て元気出たわ」と、高齢者の集える場所としても活用されています。

スタートは月1回の住民参加型会議から

泉南市では平成16年1月より、民生委員、老人クラ



出張販売は今日也大盛況

ブ役員、地区福祉委員、薬局、水道検針員、新聞配達、区長等で福祉に関心の高い地域住民（以下、「相談協力員」と、地域包括支援センター、行政、CSW等の専門職が地域課題の掘り起しを目的に、生活圏域ごとに「地区ケア会議」を開催しています。担当するB地区ケア会議では、「福祉談義」というコーナーで、孤立死や老老介護など最近起こった介護・福祉にまつわる問題を取り上げ、相談協力員と専門職とで話し合う時間があります。しかし、いずれも問題提起で終わってしまい、自地域の課題として住民自身が主体的に考えるまでには至りませんでした。

平成29年度からの総合事業開始に向け、地域資源の集約に使命感をもち、地域住民と共有しながら進めていきたいという思いで、平成27年4月から地区ケア会議の「福祉談義」を活用し、「もっと!ええ町マップ」(地域資源マップ)づくりをスタートさせました。

まず、高齢者のみ世帯や一人暮らし高齢者の生活課題を知るため、自地域のことについて相談協力員と情報共有を行いました。ごみ出しなどの小さな困りごとが解決できないという声の一方、近くのスーパーが閉店して徒歩圏内で買い物ができないという生活に直結した課題も多くあげられました。そこでテーマを「食」に絞り「店編」「サービス編」「助け合い編」「あったらいいな編」とハード面からソフト面に視点を変え、地域住民からの情報を地図に落とし込み、課題を「見える化」していきました。その結果、徒歩圏内にスーパーがなく、またコミュニティバスの便数も限られ、少し離れたスーパーへも行けない、つまり一人で買い物に行くことが困難な高齢者が増えてきていることが明らかになりました。

買い物困難者を救え!

このような地域課題を地区ケア会議で共有することで、“あったらいいな”という未来志向の話へと発展し、相談協力員から「出張販売に来てくれたらいいんじゃない?」「買い物の送迎車が走ってくれたらいいのに」などの声が上がりました。これらの希望を叶えるため試行錯誤した結果、隣接地区の商店の協力により、当センターの母体法人が運営する毎日型の地域サロン「砂川サロンいこい」で、週1回の出張販売が実現することになりました。

まずは地域の方々にご理解いただけるよう、砂川



マップの完成に必要なのは地域住民からの情報

地区高齢者見守りネットワークの協力を得て、砂川区長への趣旨説明と掲示板を活用したポスターPRを行いました。また日頃からの「いこい」利用者や周囲で買い物に困っている方への声かけや、地域に定着しているリフレッシュ教室（一次予防事業）での情報発信を行いました。販売当日は砂川地区高齢者見守りネットワークに、販売場所での見守りや重い荷物を持って帰ることができない場合のお届け等を依頼し、地域のボランティア組織を巻き込む活動としました。

地区ケア会議において相談協力員とともに考えることで、地域づくりの視点から課題の整理ができ、既存の社会資源と結びつけ、困りごとの解決に踏み込むことができました。マップづくりの過程で「地域のことを教えてください」というスタンスをとることで、地域住民が「我が事」の課題として表出し、自ら課題解決の方法を模索できる場づくりを丁寧に行いました。

この取り組みを全市的に展開できるよう「マップおひろめ会」を開催し、市内の各地区ケア会議の相談協力員を含む関係者へ一連の取り組みを発表し、普遍的な生活支援体制構築のための第一歩としました。

そして支援の手は市全域へ

地区ケア会議では、買い物の送迎車の話も出ました。この出張販売の取り組みに刺激を受け、隣接地域の自主サロンではレクリエーションの一環として、マイクロバスを借り上げ「お買い物バス」を定期運行する取り組みが始められました。他の大規模集合住宅ではスーパーの閉店をきっかけに、地域住



マップ「お披露目」から全市へ「お広め」

民と地区担当のCSWが協働し、既存のつどい場で野菜やパンの出張販売を開始しました。

また、泉南市が運営するコミュニティバスに関するアンケートを地区ケア会議の相談協力員を中心にを行い、その声が行政に届いた結果、全線が市内の大型ショッピングモールへ乗り入れることになり、今では買い物のみならず高齢者の生活全般の質を上げる貴重な社会資源となっています。

泉南市では第1層の協議体が平成28年1月より発足し、商工会や老人クラブ、シルバー人材センター等の地域の関係機関を構成員とし、地域の課題に対して各々の機関でできることを出し合い、課題解決に向けた協議が始まっています。またこれまで述べてきた地区ケア会議についても、平成28年4月より第2層の協議体と位置づけられ、さらに大きな役割を担っています。各協議体を通じて生活支援コーディネーターと協働する機会も多くなり、具体的な活動方針なども共有できるようになりました。

ここからが本番!!

住民主体の地域づくり、互助の力がこれからの生活支援を進めるなかで重要とされており、上記のような流れが非常に大きな意味をもつと考えています。今後も「住民×専門職」が協働する活動の輪が広まるよう、地域で活動する地域住民と専門職が同じ問題意識と課題に立ち向かう覚悟をもち、その覚悟を後押しすることもセンターの大切な役割といえます。その覚悟は日々の小さな連携を積み重ねた先にあると考え、私たちがめざすべき地域のあり方に向け一歩ずつ歩んでいきたいと思っています。